

いても以下のような傾聴すべき注釈を公にされている。

「笑」は綻び咲くこと。太宗の「笑[○]樹花分色、啼枝鳥合声」（月晦）はその一例。「啼人」は泣く人、用例未だ検出し得ない。「啼」は一般に鳥類の鳴く場合のほか、人の泣く場合にも用ゐることば。（中略）「笑む」即ち「笑^きく」の花に対して、昔を偲んで「啼^なく」（泣く）人を同じ句の中にもたらしした趣向。なほこの第二句は「梅花啼人に向かひて独り笑^まむ（笑^きく）」の意。盛唐劉長卿の「江花獨向北人愁」（初聞貶謫讀喜量移登于越亭贈校書）の類句がある。

（小島憲之著『國風暗黒時代の文學中（中）』一四六九・一四七〇頁）

この『凌雲集』の作品は前述の小島憲之氏の論述にあるように、道真の祖父にあたる菅原清公の書閣の荒廢をいたむ滋野貞主の詩に唱和した嵯峨天皇の御製である。この詩の表現、とりわけ二句目のそれを道真が諳んじていて自作に投影させたことは想像に難くない。

とすれば、道真の四句目「知花獨笑我多悲」の表現を『凌雲集』のそれと並べてみると、「花獨笑」と「我多悲」が対をなしている表現であることがはっきりする。異本で「花獨笑」が「花獨咲」とあるのは、意味上では同様のものだが、この『凌雲集』からの投影関係の視点で考えると「我多悲」の対であるならば「笑」でなければならぬことがわかる。